

# アイルランド文学と文化に糾う二律背反性と互酬性

あざな

—遠きケルトの記憶とエールの追憶—

田 文 揚

## ANTINOMY AND INTERDEPENDENCY RESIDED IN THE IRISH LITERATURE AND CULTURE

—THE OLD CELTIC MEMORIES AND RECOLLECTIONS OF EIRE—

RESEARCHER: FUMIAKI DEN,  
The Faculty of Economics,  
Keiai University

## 目 次

### (CONTENTS)

はじめに

FOCAL	“Celt”	英 文	〔資料 1. Statement〕
	「ケルト人」	和 訳	
INTRODUCTION	“A MISTLETOE”	英 文	
	「宿り木」	和 訳	

1	「アイルランドの民族と歴史」	－歴史に於ける被虐性－	..... 9
	(1) アイルランドの黎明とケルト人		
	ク	〔+資料 2. 地図二種〕	
	(2) 大飢饉とイースター蜂起		
2	「アイルランドの宗教と言語」	－人文に於ける二様性－	..... 12
	(1) ドゥルイド教とキリスト教		
	(2) ゲール語と英語	〔+資料 3. ケルト語系統図〕	
3	「アイルランド文学とナショナリズム」	－文学に於ける二元性－	..... 14
	(1) アイルランド文学の源流		
	(2) ケルト文学		
	(3) アングロ アイリッシュ文学		
	(4) アイリッシュ ルネサンスと独立運動		
	(5) 詩人イエイツとアイルランド		
		〔資料 4. アイルランド文学のあゆみ〕	
4	「アイルランド文化と背反性」	－精神に於ける二極性－	..... 24
	(1) アイルランドの国民のアイデンティティー		
	(2) アイルランドの風土のデュアリティー		
	(3) アイルランド文化のケイパビリティー		
5	「アイルランドの現在と将来性」	－現代に於ける二重性－	..... 27
	(1) 英国との婚姻関係		
	(2) アイルランドの今日と明日		

おわりに ・ 注／参考文献

## はじめに

アイルランド (IRELAND)<sup>(1)</sup> 島は古来緑の島、エメラルドの島、伝説と文学の、或いは学者と聖人の島と呼ばれてきた。だが、妖精も多く棲むとも言われる最果てのこの小さな島に吹き寄せた歴史の風はその風土ほど温潤ではなかった。

ヨーロッパから逃れ島に移り住み命を繋いだケルト (Celt) 達は、この地で類まれな文学や文化を開化させた。それは独特の世界観と極めて高次のアイデア (idea) の土の上に開花した大輪の華であった。その後彼等と同じ道を経て後来した幾多の民族により蹂躪される。どんな時代でも渡来者は宗教、神話そして制度や技術を言語に付随させて伝播させながら時に文芸も産み出す。だが、圧倒的なアセンダンシー (ascendancy・優位支配) の下ではネイティヴ (native・先住民) や彼等の持つ文化さえこの地上から完全に抹殺してしまうこともある。

長きに渡るイングランドによるアイルランド支配は、宝石にも例えられるその美しい島の北部に大きなヒビを入れた。アイルランドは国土のみならず言語や文学、宗教など色々なものが二片に分かたれ背反しながら、煩悶する中でアイリッシュネス (Irishness) というアイデンティティー (Identity) を彫塑してきたのだ。

アイリッシュ (Irish) には「アイルランド人 [語]」という意味の他に「おかしい程に不合理な」「不機嫌」という意味がある。アイリッシュの置かれた境遇こそが「不合理」であった。支配者側のイングランド人達にとっては「何を考えてるか解らない変な奴等」ぐらいにしか見えなかったかも知れないが、自分達を見下し支配する連中に「不機嫌面」以外にどんな顔ができたのだろうか。

ただ面従腹背をもって反骨精神を温存してきたのである。

しかし、その歴史を大観すると、アイルランドが宿命づけられた二律背反性<sup>(2)</sup>の中にはそれをもたらした異民族、異文化との互酬性<sup>(3)</sup>を含んだ異風が吹いていたことがわかる。つまり、アイルランドは背反する民族や文化等に多くを奪い去られ失った一方で、多くを互いにもたらし与え合ってきたのである。風は東西それぞれから吹いていたのだ。

本論文では、ケルトとアイルランドの歴史・宗教・言語等といった文化を瞥見した上で、アイルランド文学の二元性に関しアングロアイリッシュ (Anglo Irish) の作家と作品を通し考察する。更に、アイルランドの精神文化に於ける二極性を解き明し、アイルランドの現在と将来、そしてアイルランドに顕在した二律背反性と互酬性について論考の敷衍を試みる。

## FOCAL

The history of Celts is the 2000-year long epic story of the North European civilisation that rivalled Greece and Rome for richness, diversity and power.

—The Celts eventually made their influence felt from the Middle East to the Atlantic bringing with them a unique culture and mythology and one style of art considered to be the greatest achievement north of Alps after the Ice Age.

The Romans called them “furor celticus” and at the height of their empire Ankara, Koln, Belgrade and Milan all spoke Celtic, one of the five branches of Indo-European. Celtic languages are spoken by more than 2 million people in Brittany, Ireland, Scotland, Wales, and the Isle of Man today but Ireland is the only surviving Celtic nation State. And its first official language is Irish of the “Goidelic” group of Celtic.

— Sean G. O Ronan Ambassador of Ireland, 12 September 1985 —

From “Where has The Irish Literature come from”

## 訳文

ケルト民族の歴史はその豊かさや多様性、そして勢力でギリシャやローマと競う程だった。それはまさに北部ヨーロッパに於ける2000年にわたる一大叙事詩だったのだ。ケルト人達は氷河期の後、アルプス山脈の北部で最も業績を成し遂げたとみなされる独自の文化、神話、芸術の一形態をもたらし、中東から大西洋に至るまで多くの影響を与えたのだった。

ローマ人はローマ帝国の絶頂期にアンカラ、ケルン、ベオグラード、ミラノなどでケルト語が話されていた頃からケルト人を「フロル ケルティクス」と呼んでいた。

ケルト語はインド・ヨーロッパ語族の五派の一つである。ケルト語はブリテン島、アイルランド、スコットランド、ウェールズそしてマン島に於いて200万人以上の人々によって使われている。アイルランドはこれまで存続してきた唯一のケルト民族の国家である。アイルランドの第一公用語はケルト語の中のゴイデリック語族に属するゲール語である。

資料1. —シオーン・ジー・オー・ロノーア アイルランド大使 1985年9月12日— [筆者訳]

\*アイルランドはドゥルイドの伝説と妖精の島とも言われる。今ここに幻夢と抒情に満ち、  
いにしえ 古のケルトを彷彿させる物語を示し導入としたい。

## A MISTLETOE

— The pebbles and bubbles —

*According to a legend  
The pond water works on eye disease  
The seeds can have an effect on sterility  
This story was handed down from mouth to mouth  
In a northern forest country  
So, everything happened in the thick and still forest  
And everything was over in the thick and still forest  
The story of love belong to him and to her*

Long long ago, in a wood. a young woodcutter's living  
He heard a song floating from the wood one day  
He tried to follow it to know who was singing it  
Then he found a strange girl in the end

At their first sight, they were suddenly struck  
With the sense of a destined encounter  
But her father forbade her to meet him  
'Cause he was the one of hateful pagans

She was confined never to meet him again  
Who could keep them from meeting?  
As a signal, he threw a pebble at her window  
"Coming" said she and they met

After a few weeks she got pregnant  
Her father took his eyesight in anger  
She madly ran to that place on the pond  
She threw herself into the pond, though he's alive

Grasping the oak, he threw pebbles into the pond  
He heard "Coming" from bubbles  
Oddly enough, he changed into a mistletoe  
Red seeds still call her in spring

mistletoe—宿り木・学名 (viscum album) ヤドリギ科の常緑低木。

鳥の糞に混じり希に広葉樹の枝に落ち根を張り寄生する植物。枝は緑色で冬に淡青色の花が咲き、春に赤い実をつけ、一段とあざやか。古代ケルト族は特に樺の木に根付いたものを、神の手によって植えられ不妊やあらゆる毒に効き、不滅を象徴する万能薬と信じ崇めた。黄金の鎌で切り取られ、あらゆる宗教的儀式に欠かせない物だった。

## 宿り木

— 伝説の森 —

遙か北の国の伝説によれば  
その池の水は、目に光を失った者に光を取り戻し  
その実は、子のない男と女に子宝を授けると言う  
またその水で実を煎じれば、永遠の愛が叶うとも  
これは遠い古よりその森の国に伝わる伝説である  
すべては静まりかえった深い森の中で始まり  
すべては静まりかえったその深い森の中で終わる  
一人の若者と一人の美しい少女の、愛の物語

遙かに遠い昔、森の外れに一人の若いきこりが住んでいた  
ある日彼が仕事をしていると、どこからか美しい歌声が聞こえてきた  
彼はその声の主を確かめようと、歌声をたどり森の奥へ奥へと入って行った  
それはこれまで耳にしたことのないような、何とも温かく麗しい歌声だった  
どれくらい歩いただろうか 彼は繁みの向こうに見知らぬ少女をみつけた  
池の畔で髪を洗っていた彼女は、人の気配に気づき怯えて逃げようとした

若者はとっさに「だいじょうぶ逃げなくても！」と声をかけると、彼女は若者に目を向けた  
一目見たその瞬間から、互いに声もなくただ見つめ合い約束された出会いを感じ取っていた  
まるで前世からの知人、いやそれ以上の何とも説明し難い親しみとなつかしさを感じていた  
その日以来二人は池のほとりの檜の木の下で落ち合い、毎日毎日陽が暮れるまで語り合った  
互いにこれまでの人生はこの人に会う為の、これからの人生は二人で生きる為のものと感じた  
だが二人のことを知った彼女の父と家族は、彼女が異部族の彼に再び会うことをかたく禁じた

彼に二度と会わないように、彼女は父や兄達によって部屋に閉じ込められた  
彼女はみんなの仕打ちに逆らう術もなく、ただ毎日泣いて暮らした  
しかし、深い縁でめぐり逢い、これ程強く求め合う二人を誰が止められよう  
数日後、彼は月明りの中で密かに彼女の窓に小石を投げて合図した  
彼女はそれに気づき「今いくわ」と小声で答え、部屋を抜け出て彼と会った  
こんな風に二人は毎夜しのび逢い、影法師のように離れられなくなっていた

二人の思いは日に日に強くなり、いつしか彼女の体には愛の証が宿っていた  
彼女の父や兄達は怒りに狂い、彼を捕えて殴り蹴り、ついには彼の視力を奪った  
彼は生きていたが、彼女の父は彼は死んだから忘れるよう彼女に言って聞かせた  
彼女の嘆き悲しむその声は森中に響き、兎や小鳥、妖精までもが涙した  
彼女は泣きながら狂ったように走りだし、森の奥へ奥へと入って行った  
池の畔の檜の木の下にやって来た彼女は、そっと彼の名を呼び、池に身を投げた

すべてを知った彼は二人のこの運命を呪い、天に向かって叫び地に伏して号泣する  
光を失った目で彼はよろよろと歩き、やっとのことで池のほとりにたどり着く  
二人の思い出の場所で彼は「せめて彼女との会話を叶えて下さい」と神に祈る  
彼は檜の木につかまりながら、池の水面に小石を投げて合図する  
すると池の底から泡が立って弾け散り「今いくわ」と聞こえ出す  
来る日も来る日も彼は檜の木につかまりながら小石を投げては水面に耳を近づける  
いつしか彼は檜の木の太枝のその上で、薄緑色の宿り木に姿を変える  
毎年春になるとその宿り木は、真っ赤な実をひとつずつ 水面に落として泡を待つ

F. D.

## 1. アイルランドの民族と歴史 – 歴史に於ける被虐性 –

### (1) アイルランドの黎明とケルト人

氷河時代アイルランド島はブリテン島と繋がりブリテン島はヨーロッパ大陸と繋がっていた。氷河が溶け始め人間の食糧となる大鹿がアイルランドに姿を現した紀元前8000年頃には、アイルランドはブリテンから離れて北海道より少し大きい無人島として、その歴史を始めることになる。

新石器時代の過渡期の紀元前6000年頃アイルランド島に最初に姿を見せた人間は、狩猟の民としてスカンジナビアからブリテン島を経由し入島したカンピグニア人 (Campignian)、スペイン北部よりやって来たアストリアン人 (Asturian) だった。彼等はその後、ケルト人がアイルランド島に渡来するまで先住の民となった。ケルトという種族の名称が歴史に最初に現れたのはギリシャの歴史家ヘロドトス (Herodotos) の著述の中、西ヨーロッパに住むケルトイ (kilt-oi) としてだった。これはギリシャ語の別名でガラタイ (Galatai) とも呼ばれ、ローマ人からはケルタエ (Celtae) またはガリ (Galli) と呼ばれた。彼等は長身で肌は色白の碧目紅毛の民だったという。一部に金髪もいたということから、混血が進行していたと考えられる。ケルトの原意は「優れた者」であったが、当初文字を持たず自らの歴史を残していない為神秘に包まれていた。ローマ人はケルト人の起源が地獄であり冥府の神プルトー (Pluto) の子孫であるとし、ギリシャ人がしたように彼等を好戦的な野蛮人として見下していた。ケルト人は元々コーカサス北側から一万年前に西に移動して一部は小アジアから地中海を渡りヨーロッパに移住した。彼等は紀元前1200年頃までに中央・西部ヨーロッパを支配しハルシュタット (Hallstatt) とラ・テーヌ (La Tene) 鉄器文化<sup>(4)</sup>を伝播させ、強い武力を持った。だがケルトは中央集権化された権力による帝国を形成せず、部族別の王国を多数生んだ。それ故、勇猛果敢な彼等も結局ローマ人やゲルマン人に居所を明け渡しつつ、ブリテン島やアイルランド島にまで逃れる羽目になった。

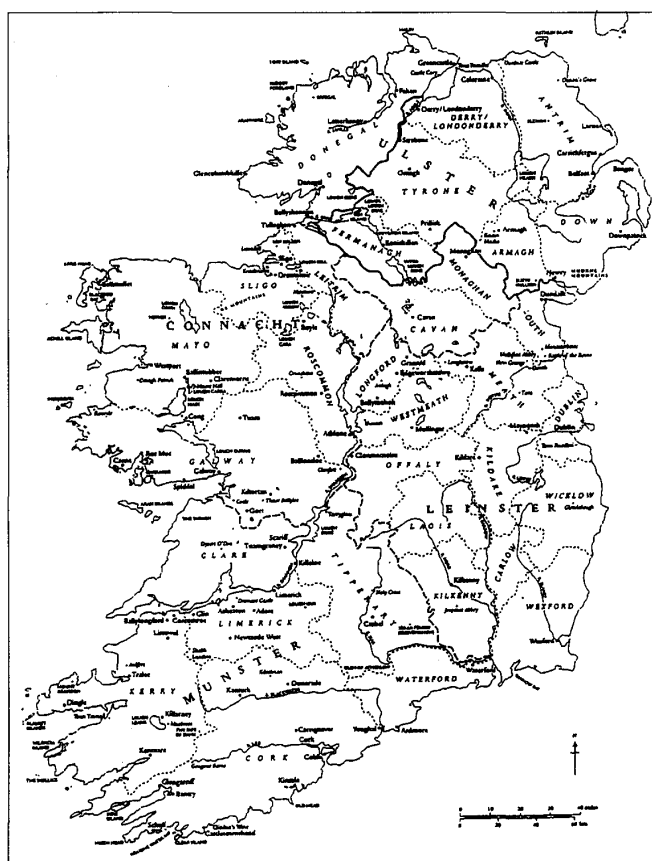
紀元前800年～500年頃にかけてヨーロッパ北部に広がったケルトは波状的にブリテン島に渡来し、アイルランド島へは紀元前500年～200年頃にかけてイベリア半島とブリテン島から渡来し、文化の優位性をもって緩やかに先住民と同化し独自の文化を育んでいった。

紀元1世紀ブリテン島 [スコットランドを除く] はローマに制圧されるがアイルランドには支配の手は及ばなかった。また4世紀頃ローマによる支配が弱体化するや、アイルランドはブリテンに攻撃をしかけて、ウェールズやスコットランドに植民地を成立させた経験を持つ。

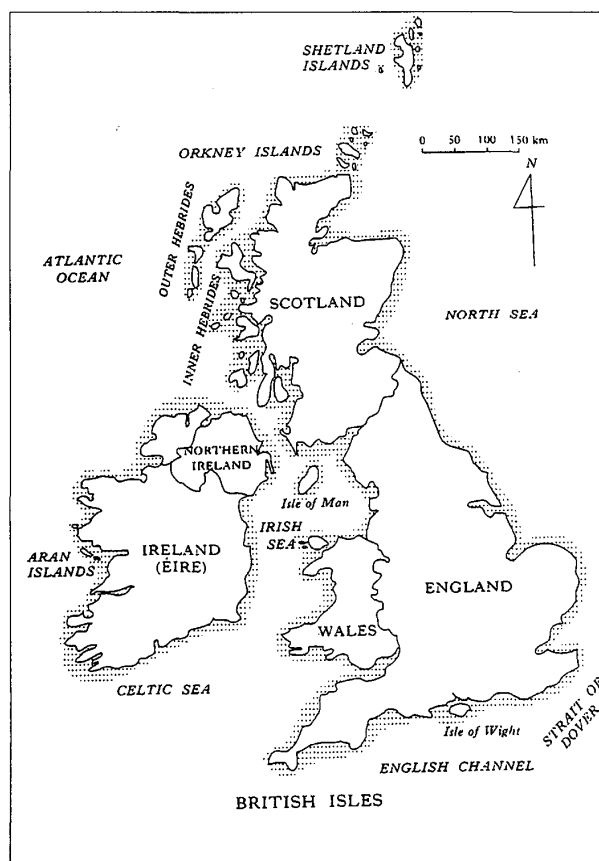
しかしその後、紀元795年よりヴァイキング (viking) の、1169年よりアングロ・ノルマン (Anglo Normans) の侵入を受けた後、1171年のイングランドの侵攻以降の優位支配の下で、800年間に渡り煩悶することとなる。

実のところ過去にも現在にもアイルランド人なる単一民族は存在せず、現在存在するのはゲール系・ノルマン系・イングランド系・スコットランド系アイルランド人である。また、行政上の区分は12世紀末に島をアルスター (Ulster)・レンスター (Leinster)・マンスター (Munster)・コノート (Connaught) の4地方に分けたものが現在に続く。現在では地方は更に州に分割され北都アルスターの9州のうち6州が英国に帰属した。あとの3州と他の3地方の23州を合わせた26州がアイルランドを構成している。

この国は黎明期より民族的多様性や地理的、政治的二重性を宿命づけられることとなる。次にその長い歴史の寒風の中でひび割れた現在のエメラルド (アイルランド) を掲出する。



[地図2] アイルランド全土・北アイルランド



[地図1] イギリス諸島

資料2. -WORLD ATLAS: Hammond Incorporated, Maplewood NEW JERSEY-

## (2) 大飢饉とイースター蜂起

新大陸からスペイン経由で1590年頃アイルランドにもたらされたジャガイモは、酸性土で決して肥沃でないこの土地にもよく育ち、耕地の3分の2と主食の座を占めるに至った。人口もおおよそ300万人 [1700年]・400万人 [1802年]・817万人 [1841年]と急増した。しかし、ジャガイモの立ち枯れ病の発生による大飢饉 [1845～1849年] そしてそれに続く栄養失調、赤痢、回帰熱の蔓延などにより1851年の調査では人口は655万人に激減した。この数値と大飢饉が存在しなかったと仮定した時のカウンターファクチュアルモデル (Counter Factual Model)<sup>(5)</sup> に基づく推計では、この時期約100万人が死亡、移民による減少は約120万人と推定されている。大飢饉以降現在まで約700万人が米国に移住した。この移民の特徴は故国への帰国者が少ないことと、女性の移民が非常に多いことであった。最も減少数が著しいのは貧しい島の西部であり、種芋にも手をつける程で人々は干からびたジャガイモの如くに痩せ衰えていった。この病気はヨーロッパ大陸からブリテン島を経由して東からやって来た。アイルランド人達は「忌わしいものはすべて東からやって来る」と思ったに違いない。最も救済が必要な時にも支配者であるイングランドは無策だった。ヨーロッパからの穀物緊急輸入を中止しただけでなくアイルランドから公然と穀物を輸出させていたのだ。アイルランドのナショナリストのジョン・ミッチェル (John Mitchell) は「神が立ち枯れ病を我々に与えたが、イングランド人が飢饉を作り出した」と言った。飢えた人々は「棺桶船」と言われる粗末な船で国外に難民同然で移住せざるを得なかった。米国などに行く途中5分の1の人々が水葬にされたという。海外への脱出は国を見捨てることを、国に残るのは死を意味した。かつて西からもたらされたジャガイモによってこの国の人口は急増して、ジャガイモによって激減した。そして島の最西端の港から皮肉にもジャガイモの発祥した西へと漕ぎ出し、命をつないだのだ。人口は1991年に350万人まで減り、現在400万人に増加した。その脇でイングランドは産業革命の下、新興産業が圧倒的に高い生産性を手にし、やっと芽生えた小規模なアイルランドの産業の芽を摘み採った。

この大飢饉はアイルランド人の心の中に深い精神的外傷 (トラウマ) となって反英感情を今に残している。大飢饉の終盤の1848年の「青年アイルランド党」によるマンスターでの一斉蜂起後、民族意識がどんどん高まり、次いで文芸復興の運動が起こっていった。その後も小規模な蜂起を幾つか経て、あの1916年の「イースター蜂起」<sup>(6)</sup> へと連なる。蜂起は失敗に終わり16人の処刑をもって終結するかに見えたが、その後もIRA<sup>(7)</sup> を生み内患する。その後1921年に多くの血と北アイルランドを生け贄にアイルランド自由国の誕生を見た。この時代にアイルランドはまたしても、多重なる背反と遭遇したのだ。

## 2. アイルランドの宗教と言語 ― 人文に於ける二様性 ―

### (1) ドゥルイド教とキリスト教

ケルトは自然信仰の多神教であるドゥルイド教 (druid) を信仰していた。

この名称の前半部ドゥル (dru-) は「櫟の木の知恵」を意味し、後半部イド (vid) 「見る・知る」という語根が変化したものだ。つまり「櫟の木の知恵を知る者」「大いなる知恵者」という意味である。ケルトは一般に櫟の木を神聖視し、更にブリテン島のケルトはそこに寄生する宿り木を、アイルランドのケルトは <sup>はしばみ</sup> 榛 を強い霊力がある木として崇めた。

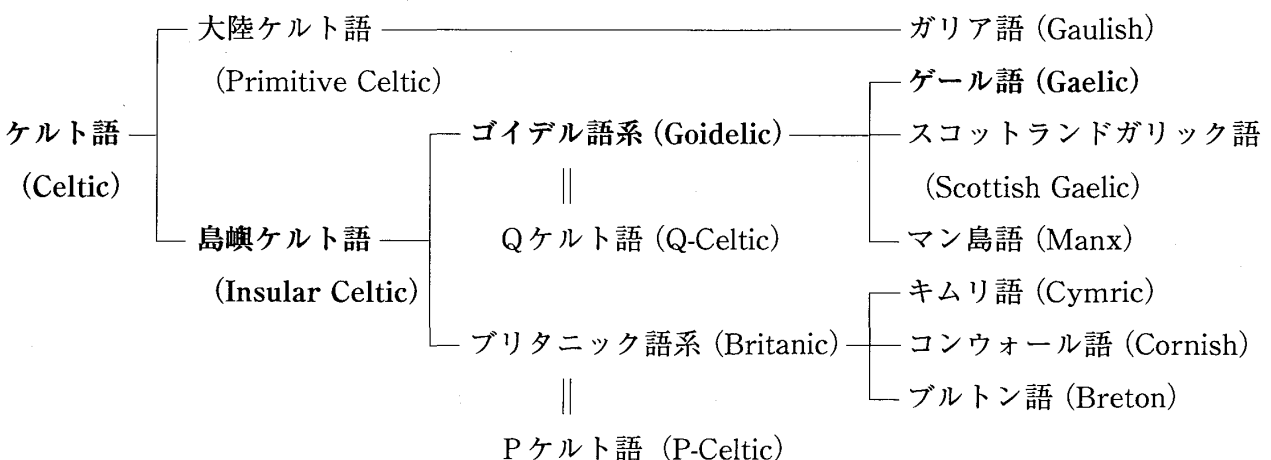
カエサル の「ガリア戦記」(Commentarii de Bello Gallico) には「ケルトは時を夜で計りドゥルイドの教えはブリタニアにて始まりガリアに伝えられた。ドゥルイド達 (神官達) は天文・詩・医術・占い等の知識を20年以上かけて諳んじ、選挙により選ばれた知的エリートであった」とある。教義はあらゆるものに霊が宿り物質と靈魂は永遠不滅であって、宇宙の実体は水と火が交互に支配する現象の絶え間ない変動の下で不変である。人間の靈魂は転生に委ねられ、死後他の肉体に移動するか彼岸に生き続けるというものだ。この信仰は森を拠とし、自然は征服する対象ではなく崇敬し共生するものと捉えた。「転生と来世」という概念がドゥルイド教の体系の基礎を成し、多くの点でむしろ仏教的ですらある。

紀元432年ブリテン島より「聖パトリック」(St. Patrick)<sup>(8)</sup> がキリスト教をもたらす。当初、一神教で輪廻思想を持たないキリスト教とドゥルイド教は相容れず、聖パトリックとドゥルイド神官達との宗論の衝突もあった。聖パトリックは難解なキリスト教の概念を庶民に解り易く教え、土着の信仰をキリスト教に融合させることで布教を成功させた。この為よろずの神々は引き続き神話や伝説の中で伝承され、その一部は地上に降りて妖精となり、石造りのケルトの十字架などにも文化の融合が見てとれる。この頃から物語にも「異教的色彩」と「キリスト教的色彩」という背反するもの同士が共存し、ドゥルイド教はキリスト教から多くの神学や宗教様式を、キリスト教はドゥルイド教から斬新な文芸や全く異なる価値観や世界観を学び、互いに深化を遂げた。だが一方で、キリスト教文化が原アイルランドから少なからず奪い去ったものもあった。緩やかな互酬関係の持続の中、6世紀頃から修道院制度と学問研究の発展を見た。その後6～7世紀にかけて修道士達はイングランドを含む海外(フランス・ベルギー・ドイツ等)へ布教に打って出るのに伴い、大きな学術成果をヨーロッパ世界に示す結果となったのである。この頃よりアイルランドは他の国々をして「聖者と学者の島」と言わしめた。

## (2) ゲール語と英語

ケルト語はインド・ヨーロッパ（印欧）語族の一員の言語であり、ゲール語（Gaelic）はアイルランドで発達したケルト語の一派でスコットランドのガリック語（Scottish Gaelic）などと区別する。ウェールズの人々がアイルランド人の言葉をグウィデルグ（Guyddeleg）＝「緑の」という意味で呼んだことに由来する。この島は「緑の島」「エメラルドの島」と呼ばれ妖精は緑の服を着ており、現在でも郵便ポストや軍服は緑色であり旅客機もクローバーに似たシャムロックの緑葉を付けている。緑こそこの国を象徴する色なのである。ケルト語は文頭に動詞がくるという文型を原ケルト時代から現在に至るまで持っている。これは印欧語の最も古い文型の組み方のようだ。ケルト語はヨーロッパ大陸で用いられる「大陸ケルト語」とブリテン島北部とアイルランド島で用いられる「島嶼ケルト語」とに大別される。ローマの進出で大陸に於けるケルト語は中世まで存続せず、ブリテン島でもウェールズにキムリ語が、スコットランドにガリック語が辺境に僅かに残るのみだ。

アイルランドではローマの支配が及ばなかった為、高度な音声言語にまで発達しラテン語から美しいゲール文字を生んだ。その後にケルト文学が7～11世紀頃まで、ヨーロッパ随一の文学として咲き誇ったのだ。しかし、ヘンリーⅡ世に始まる12世紀以降の800年に渡る植民地政策により英語化が進行し、ゲール語は衰退を余儀なくされた。英語自身もアングロ語をベースに、サクソン人・デーン人そしてヴァイキングやノルマン人の言語に侵侮されながら生まれた言語なのだ。独立後に表向きの第一国語の地位を取り戻すまで、ゲール語の受難の時代が続くのである。母語を剥奪されたいらだちの中、アイルランドは言語に於ける二重性、背反性の直中に身を置き葛藤することとなる。



資料3. ー三橋敦子：「アイルランド文学はどこからきたか」 P.18 ー

### 3. アイルランド文学とナショナリズム ― 文学に於ける二元性―

#### (1) アイルランド文学の源流

バーナード ショウ (J. Bernard Shaw)・サミュエル ベックェット (Samuel Beckett)・シェイマス ヒーニー (Seamus Heaney)・ウィリアム バトラー イェイツ (W. B. Yeats)・ラフカディオ ハーン (Lafcadio Hearn)・ジェイムス ジョイス (James Joyce), オスカー ワイルド (Oscar Wilde). 彼等は多くの場合、英文学の巨人として括られるがアイルランドが生んだ文学者である。このうちの4人のノーベル賞作家を始め多くの文化人が、書く為に思想の自由を求めアイルランドを離れ有名になった。これは皮肉にもこの国が長年かけ融合させ発展させてきた、カソリックを基調とする神国家に対する決別であった。

「センサーシップ ボード」の名の下で教会、聖職者、国家による言論抑圧があったのだ。アイルランドには多様な言語が流入し、母語を殆ど喪失して結局は英語を押しつけられた。言語的主体が複雑に変化、交替してきたこの地の履歴を考えると、「アイルランド文学」とは一体何か、そしてその担い手は誰なのかを断ずることは困難なことである。

文学は人間の精神活動のダイナミックスから生まれる。どこの国の文学でも、どのような言語の話し手達はその地に訪れて定住し、彼等の言語が如何に先住の文化を通して混交し、濾過され、やがてどのような道筋を経て「その地の言語」になり得たかに依る。

その土地や国の文学は、あたかも様々な地から流れ来る小川の水を受け入れながら、周囲の土地を豊かに養いつつ悠々と流れる大河にも似ている。その地、アイルランドの文学は主に二本の源流を持っており二元の構造を持っている。又は二種類の文学があると言ってもよいだろう。

一つは7世紀に遡る、土着のゲール語で書かれた「ケルト文学」であり、もう一方は征服者であるイングランド人の言語である英語で書かれた「アングロ アイリッシュ文学」だ。このアイルランド文学に於ける二律背反性は、歴史が雄弁に語るこの島国の正直な特質の反映に他ならないのである。詩人のトマス キンセラ (Thomas Kinsella) はこんな状況にあったこの国の文学を比喻まじりにこう述べた。「いわば二本の木が一本になって成長し、この二重の幹を持った木からはやけた枝々が伸びている。しかし二本の幹は互いにぐると反対に向きを変えてしまい、その継目はゆっくりとねじれた傷跡を生々しく見せている」このトラウマとも言うべき緊張状態は言語に埋め込まれ、そこに今日のアイルランド文学の心象風景を見ることができる。

## (2) ケルト文学

紀元前400～200年頃、ケルト人達がアイルランドに到来した。定住した彼等は集落を形成しやがて部族国家を発展させていく。青銅器時代を経て黄金や鉄製品を輸出するまでになる。また、彼等は過ぎ去りしラ・テーヌ時代の記憶として戦士達の活躍を語り継いだ。多くは伝説と実在の二重性の中から文学の芽生えに至ったと考えられる。

戦争が始まると語部<sup>かたりべ</sup>は族長に随行して戦闘の模様を完璧に記憶し、族長の館で居並ぶ高官や武人達の前で武勲を称える物語として朗じた。真つ暗な広間に響き渡る声で、一字一句間違いない美しい表現で語ることが求められた。このような語部は仕事の性格上、世襲が多く、館での催し事では常に上席を占めたようである。詩の世界ではドゥルイドの素質をも備えたフィラ (File) が最高位であり予言も伝えた。中位のドゥルイ (Druí)、下位のバルド (Bard) の三種類があり、詩の優秀なることを競い合った。口承文学期以降の紀元500年頃より文字文学が始まり徐々に移行するが、二つの文学形態はその後多少の併存を見る。そして古代ケルト文学時代 (600～900年)・中世ケルト文学時代 (900～1200年) を迎える。ケルト文学の黄金時代は美術に於けるそれともほぼ時を同じくして7～11世紀だ。

この黄金時代への道は三通りあったと考えられる。

- ① 語部やフィラ達が族長の館で語る物語などの口承文学。
- ② キリスト教伝来と共に移入したラテン文字から変化したケルト文字による僧院文学。
- ③ 一般民衆の間に存在した民話伝承者や歌謡 (Abhran) の歌い手達の描き出す庶民文学。

このように支配階級・僧侶・庶民のすべての階層に文学の根が広がっていたのだ。

スコットランドの詩人ジェイムス マックファーソン (James Macpherson) が英訳したという9～10世紀の作品と見られる「オシアン作品集」(Ossian Cycle) はゲーテ (Goethe) やナポレオン (Napoleon) にも愛読され各国のロマン派詩人に大きな影響を与えた。しかし、17世紀の中葉にクロムウエルが来征し血の弾圧を行ったことにより、ケルト文化の秩序や伝統はことごとく破壊されて著しい言語の衰退へとつながった。その結果ケルト文学はアングロ アイリッシュ文学にその王座を譲っていく。しかし、人々がケルト文学に関心を捨てきれないのは、そこに原ヨーロッパの精神がたぎるケルトの心が脈々と息づくからだ。アングロ アイリッシュ文学、更にはキリスト教文化にはない光彩に出会えるからなのだ。

ケルト文学の特徴は神秘性・想像性・諧謔性が指摘されるが、次のような論述も見られる。「現実的であるよりも夢想的であり、客観的であるよりも主観的であり、戯曲的であるよりもむしろ抒情詩的であり、道義的であるよりもむしろ主情的である。また、物質的には敗残者であるが故に、外面的には陽気であっても内心には涙が湛えられる。明白な動機からでは

なしに、悲喜哀歓を一にしたような幽鬱が彼等を閉ざしている」

—尾島庄太郎：「世界文芸大辞典」P.117—

最早滅び去らんとするケルトの文芸の栄光を悼み、こんな詩が詠まれた。

“Sweet Tongue of our Druids and bards of past ages!

Sweet Tongue of our monarchs, our Saints and our sages!

Sweet Tongue of our heroes and free-born sires!

When we cease to preserve thee, our glory expires.”

John Bayley: Romantic Survival. P.152. —Anon “Eire Go Bradh” —

なんと甘美なるかな、過ぎし日のドゥルイド僧や詩人の言の葉

なんと華麗なるかな、我等が王者や聖者そして賢者達の言の葉

なんと美しきかな、英雄そして自由の身に生まれし貴人の言の葉

我等をして言の葉なる汝を存続さするを止むる時

我等が栄光はただ消えゆくなり 消えゆくなり

ジョン ベイレイ：Romantic Survival —詠み人知らず・筆者訳—

### (3) アングロ アイリッシュ文学

アイルランドの文学は複雑な歴史に曝されながら展開されてきた。そんな中、紀元11世紀から16世紀の終わりの間にはアイルランドにはケルト語・ノルマン系フランス語・ラテン語・英語の4つの言語が使われていた。その後、17世紀より英語が優勢となってケルト文学に取って代わったのがアングロ アイリッシュ (Anglo Irish) 文学である。

「アングロ アイリッシュ」という表現はアイルランドに於けるイングランド人入植者、及びその子孫を指すが、やがて彼等の文学や言語に適用されるに至る。つまり、アングロ アイリッシュ文学とは「アイルランド人の英語による著作」を意味している。アングロ アイリッシュ達はイングランド人から見れば、プロテスタントとカソリックの別なくアイルランド訛の英語を話すアイルランド人に過ぎない。そこでアングロ アイリッシュ達は選択を余儀なくされる。多くはイングランド人に対しアイルランド人として対峙する道を選び、自分達の中にアイルランド人としてのアイデンティティーを求めたが、国内のカソリック系同胞とは信仰的にも伝統的にも相客れないものがあった。彼等の民族意識は二重構造を持っていたのだ。

英文学に於けるアングロ アイリッシュの作家達の貢献はとても大きい為、その作品は英文学として一緒にされてしまう事が多い。イングランドを辛辣に皮肉ったスウィフト (Jonathan Swift) でさえ例外でない。だがしかし、肉体的特徴も精神的文化の土壌も全く異なる二親の間に生まれた混血児の如き文学こそがアングロ アイリッシュ文学である。

また、その混血児も一人っ子ではなく、それぞれが違う生い立ちと個性を持っているのだ。おおよそ次のような4人兄弟達である。

- ① イングランドに居住するアイルランド系の子孫などがケルト文学を意識しつつ英語で書く。作品は英文学史の中に織り込まれイングランドの作家として登場し、ゲール語の影響はほとんどないものの着想はどこか抒情的、幻夢的である。  
作家ではライオネル P. ジョンソン (Lionel P. Johnson) などが挙げられる。
- ② イングランドからアイルランドへ移住した居住者がケルト文化の色彩を多く取入れた作品を英語で書く。ゲール語の影響が多少ありケルトの香りを残す。  
作家ではオリヴァー ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) などが挙げられる。
- ③ 土着のアイルランド人 [多くはケルト系] がゲール語地区のゲルタハト (Gaeltacht) に居住し、農民などの生活を題材にした作品を書く。ゲール語に精通し、ゲール語の話音の取り方で英語の単語の発音をし、その音を表現するため綴りまで変えて英語で書く。作家ではウィリアム カールトン (William Carleton) などが挙げられる。
- ④ 土着のアイルランド人以上にアイルランド的になったイングランド系作家が、文学の源泉を古代のケルト文学の黄金時代に求め、好んでケルト思想を謳歌してゲール語の慣用語法を英単語に置換して、語順もほぼそのまま英文の中に挿入する「アングロ アイリッシュ語法 (Anglo Irish Usage) を用いた所謂 “Gaelic Idioms in English” で書く。英語の作品より一層詩的で抒情的であり高度な文学性を持っている。

作家ではジョン ミリントン スィング (John Millinton Synge)・W. B. イェイツ<sup>(9)</sup> (William Butler Yeats)・グレゴリー夫人 (Isabella Gregory Augusta) 等が挙げられる。

アングロ アイリッシュ文学は根底ではキリスト教文化とは全く異なるケルト的知性の活発さと霊性への憧憬を抱き続け、ケルト文学から多くを手に入れた。だが、作品表現を英語ですることが一般的になることはつまり、イングランドの植民支配が定着したことを意味するのみならず、文化的・精神的にもイングランド化が進行したことを意味する。

イングランド化は歴史でも多くの場合もそうであった様に、まず政治的な動きに始まった。しかし、このイングランド化は直線的に単純に進行した訳ではない。

アングロ アイリッシュ文学の一方の担い手であったイングランド人の移住者やその子孫達は、確かに英語で読み書きをしアイルランド文学の中で多くを成し遂げてきた。しかし、彼等の精神構造はアイルランド的思考を持ち、もはや自分の祖国はアイルランドだと意識していた。征服者の数の方が少数である場合、先住の民との文化的な混血を経て、母国のそれとは異質なものになるのが常だ。ましてや文化と政治の結び付きが濃密なこの地では、文学一つについて論じる場合でも政治的、文化的、そして言語的、歴史的な命題に関する総合的な論議が必要になってくる。二元に発する二つの文学の流れは衝突し渦を巻き合流して現代の文学へと続く。だが驚くべきは、河口付近で今だにケルトに由来する幾つかの有力な支流を持っていることである。

**アングロ アイリッシュ文学** はケルト文学から「新奇な世界観と異彩な表現、そしてインスピレーション」を手に入れた。

**ケルト文学** はアングロ アイリッシュ文学から「陰気な世界観と多彩な表現、そしてシヴィリゼーション」を手に入れた。

元来、すべてに於いて背反関係にあるようにも見えるアングロ VS. アイリッシュだが、実は互いの中に大きな影響と利沢を見て取れる。それらの互酬関係の持続があつてこそ、文学、文化に於ける昇華があつたことは否定できない。利害得失と互酬は隣り合わせだ。

#### (4) アイリッシュ ルネサンスと独立運動

アイルランドが英文学に一番貢献を果たし、同時に独自性を発揮したのは演劇の分野だ。作家もウィリアム コングリヴ (William Congreve)・バーナード ショウ (Bernard Shaw)・オリヴァー ゴールドスミス (Oliver Goldsmith)・リチャード ブリンズレー シェリダン (Richard Brinsely Sheridan)・オスカー ワイルド (Oscar Wilde) と枚挙に暇がない。彼等は英国文学の伝統の中に含められるアングロ アイリッシュの作家達である。

大飢饉後、19世紀のアングロ アイリッシュ文学の最盛期に起こったアイルランドのルネサンス運動は、ギリシャ、ローマ時代ではなく自国のケルト文学の黄金時代への回帰を目指すものだった。アイルランドのナショナリズムと伝統に根差した真のアイルランド文化の再構築に向け、ゲール語の復活・民族文芸や芸術の再生という広範囲な運動だった。

この運動の為にペンをとったアングロ アイリッシュ達も少なくなかった。上述の作家達もこの仲間だ。この運動の中心にはゲール同盟 (Gaelic League) と国民劇場アーベイ劇場 (Abbey Theatre) があつた。

ゲール同盟はその後1938年から1945年まで大統領を務めることとなるダグラス ハイド (Douglas Hyde) により1893年に設立され、ゲール語の保存と復活を目指してゲール語劇をアーベイ劇場で上演したり、ゲール語の学校を設立するなどし文化の復興に努めた。

人々はアーベイ劇場で民族の神話劇を見ては、民族自立の気概をたぎらせたのである。

詩人でもあったハイドはケルトの伝説を集め「コナハト恋歌」(Love songs of Connacht) や「初期ゲール文学史」(The story of Early Gaelic Literature) 等を著し運動の推進力となった。こうした一連のルネサンス運動は、大飢饉を生き抜いた人々の中から生まれた。

大飢饉後のナショナリズムがルネサンスを、そしてルネサンスがナショナリズムを押し上げ、幾つかの独立闘争を経て、1916年の血まみれのイースター蜂起とその後の独立へと繋がる。その順序は「大飢饉」-「ナショナリズムの高揚」-「ルネサンス」-「蜂起」である。

まさに文学が演劇の如くにドラマティックに一国の運命の終幕を変えたと言ってもよい。

#### (5) 詩人イエイツとアイルランド

1890年代から1930年代に渡る独立に向けた激動の時代を生きたアングロ アイリッシュの詩人にイエイツがいる。彼は否応なしに時代の政治的、社会的問題に深く関わりながらアイリッシュとしての民族意識を深め、作品群の出発点とした。彼は生粋のアイリッシュではなく、アセンダンシーの中でのプロテスタント系アングロ アイリッシュであり当然のことながら二重の民族意識の二律背反に悩まざるを得なかった。1885年のある夏の日ダブリンの小さなパブで二十歳になったばかりの無名の詩人イエイツがJ. オレアリ (John O' Leary) と出会い意気投合した事がアイルランド ルネサンスの始まりだ。彼は早くからアイルランドに対する愛着とケルトへの回帰の願望を思わせるこんな作品を書いている。

Though I am old with wandering	谷間や丘を漫ろ歩くうちに
Through Hollow lands and hilly lands,	私はこんなにも年老いてしまったが
I will find out where she has gone,	きっと消え失せた彼女の行方を探し
And kiss her lips and take her hands;	かの唇に口づけて 手をとって
And walk among long dappled grass	斑に丈なす野の草々を踏み分けつ
And pluck till time and times are done	この世の終わりまでも摘み続けん
The silver apples of the moon,	月に照らさるる 銀色の林檎を
The golden apples of the sun.	日に照らさるる 金色の林檎を

(W. B. Yeats: The Collected Poems of Yeats.)

—“The song of Wandering Aengus”—

—「さまよえるイーンガスの歌」筆者訳—

「葦間の風」に於いてイエイツが幻夢的で抒情的な心境の中、韻律法と象徴法を通して謳った作品だ。伝説の愛の神イーンガスが探し求めるのは、小鱒から髪に林檎の花をさした美しい少女に変身して消え去った妖精「シイ」が象徴する「愛と美」である。ケルトはその昔夜（月）で、その後昼（日）と夜（月）で時を計った。そして今は昼（日）のみで時を計る。イエイツはイーンガスに託して失われしケルトへの思慕と憧憬の念を吐露する。

また、来るべき独立を思念しこの国の歩むべき道の道標たらんと、こんな詩を書いている。

Know That I would accounted be  
True brother of a company  
That sang, to sweeten Ireland's wrong  
Ballad and story, rann and song;  
Nor be I any less of them,  
Because the red-rose-bordered hem  
Of her, whose history began  
Before God made the angelic clan,  
Trails all about the written page.  
When time began to rant and rage  
The measure of her flying feet  
Made Ireland's heart begin to beat;  
And time bade all his candles flare  
To light a measure here and there;  
And may the thoughts of Ireland brood  
Upon a measured quietude.

Nor may I less be counted one  
With Davis, Mangan, Ferguson,  
Because, to him who ponders well,  
My rhymes more than their rhyming tell  
Of things discovered in deep,  
Where only body's laid asleep.

(W. B. Yeats: The Collected Poems of Yeats.)

—“To Ireland in the Coming Times”—

わかってくれ この国の受けた酷い仕打を  
癒す為、私はバラッドや詩や物語を書いた。  
私が詩人の仲間の真の兄弟だと言うことを  
わかっていて欲しいのだ。  
詩人の仲間の中でも決して劣ってないのを。  
神が天使族を作られるずっと前から  
この国の歴史は始まっていたのだ  
私の書く詩のページいっぱい彼女の歴史  
の紅い薔薇の縁取りの裾が広がってるから。  
「時」が叫び怒りを露にする時  
母国の飛ぶような足取りの律動は  
母国の心臓に鼓動をもたらした。  
そして「時」はあらゆる蠟燭に火を灯し  
ここかしこで足取りの律動を照らし出す。  
願わくはわれらがアイルランドの思潮が  
静かなる律動の上にあらんことを。

願わくはデイビス、マンガン、ファーガソン等と同等でも  
決して劣らない詩人だとわかって欲しい。  
賢き人にはわかってもらえるだろう  
われらが肉体のみが地に横たわる時  
魂の深き淵底に見出だされる諸々を  
私の詩は彼等の詩より多くを語る故。

—「来るべき時代のアイルランドへ」筆者訳—

イエイツは薔薇をモチーフに詩を多く書いたが、薔薇はもちろんアイルランドを表わす。この詩は詩集「薔薇」の巻末詩である。彼自身が熱心に政治活動していたアイルランドルネサンス期に書かれたこの詩に至っても、表面上は政治色や民族主義はない。しかし、象徴主義、神秘主義への傾倒から母国のアイデンティティーの確立の必要性を確かに認知していたのではないか。アイルランドへの愛慕の情を直<sup>ひたかく</sup>隠し、卑屈なまでに自分を売り込んでいる。「時」は来るべき時代を暗喩し、文芸復興と独立への情熱を下支えする。

今ここに1916年のあの「イースター蜂起」でアイルランドのために散った勇者達の勲を讃える詩がある。

Come gather round me, players all:  
Come praise Nineteen- Sixteen,  
Those from the pit and gallery  
Or from the painted scene  
That fought in the Post Office  
Or round the City Hall,  
Praise every man that came again,  
Praise every man that fell.  
*From mountain to Mountain ride  
the fierce horsemen.*

さあ役者達よ、皆私の周りに集まれ。  
さあ讃えよう、あの1916年を。  
平土間や天井棧敷席から、  
絵に描かれた背景の舞台から集まれ。  
郵便局に立て籠もった者たちよ、  
市役所の周りで戦った者たちよ。  
さあ讃えよ、再び訪れし皆々を、  
さあ讃えよ、戦に倒れし皆々を、  
猛々しき騎馬武者等は  
山から山へと駆け巡る。

Who was the first man shot that day?  
The player Connolly,  
Close to the City Hall he died;  
Carriage and voice had he;  
He lacked those years go with skill,  
But later might have been  
A famous, a brilliant figure  
Before the painted scene.  
*From mountain to Mountain ride  
the fierce horsemen.*

誰か あの日真っ先に撃たれしは。  
それは役者コノリーだ。  
市役所の近くで彼は死んだ。  
立ち居振る舞いも声も申し分なかった。  
演技を磨く年月こそ十分ではなかった。  
だが、彼がもし生き延びていたのなら  
絵に描かれた背景の舞台のその前で  
ひとかどの役者になっていただろう。  
猛々しき騎馬武者等は  
山から山へと駆け巡る。

Some had no thought of victory	勝利のことなど念頭にはなしに
But had gone out to die	アイルランドの精神を崇高にし
That Ireland's mind be greater,	祖国の心を気高くせんとして
Her heart mount up on high;	死に赴いていった者達もいた。
And no one knows what's yet to come.	その先のことなど誰が知ろうか。
For Patrick Pearse had said	何時の世もアイルランドの血は
That in every generation	流されなくてはならないのだ、と
Must Ireland's blood be shed.	パトリック ピアスは言ったから。
<i>From mountain to Mountain ride</i>	猛々しき騎馬武者等は
<i>the fierce horsemen.</i>	山から山へと駆け巡る。

(W. B. Yeats: The Collected Plays of W. B. Yeats)

—“Three Songs to the One Burden”—

—「一つの折り返しに三つの歌」筆者訳—

この詩は詩集「目撃者」(Spectator)の中で上記タイトルの詩の三番目にある詩である。イースター蜂起と犠牲になった16人の勇者達は、イエイツにとって終生の詩作のテーマとなった。復活祭の日の蜂起は正にアイルランド自身の復活を賭けた武装蜂起だったのだ。だが、実は蜂起で逮捕され処刑されたのは15名だった。1名の不合は以下の理由による。

ダブリン市内の郵便局前を56人が隊列を組んでいた。先頭中央にジェイムス コノリー (James Connolly)、右にパトリック ピアス (Patrick Pearse)。蜂起には義勇軍・市民軍合わせて2200人が加わった。コノリーの「中央郵便局へ突撃!」の号令で始まった。だが、この蜂起の失敗は始めから分かっていた。世界が第一次世界大戦 [1914~1918] の直中にある時蜂起は決行された。蜂起の際に使用される武器弾薬を満載したドイツからの輸送船が前日アイルランド沖で英国海軍に撃沈された。蜂起中止を訴えるため急遽潜水艦で帰国した直後に捕まり、反逆者として処刑された元英国領事のロジャー ケースメント (Sir Roger Casement) をイエイツはあえて加えた。この詩を演劇のイメージとメタファーで描き、悲劇の役者達に仮象の舞台を去らせ不朽の名を与え永遠の世界に住む者とした。

またしても他のヨーロッパ諸国もブリテンのケルト達も、プロテスタントもカソリックもこの島を救ってはくれなかった。イエイツ自身に流れるその血のアセンダンシーに於いても背反し、心の中に二重の層を形成し続けたことであろう。それでも彼は父なる東の島を嫌悪して、母なる西の島を慕い求めた。あたかも彼自身がアイルランドであるかのように。

アイルランド文学のあゆみ

# アイルランド文学のあゆみ

ゲール語による文

B.C.  
500  
↑  
B.C.  
A.D.

ケルト人の渡来

Amergin (実在とも考えられている伝説上の詩人)

ダナーン族説話団  
赤枝騎士説話団  
フィアナ説話団  
オシアン説話団

口承文学

— 現在に至るまで語り継がれている

文字文学へ移行する

St. Patrick (パトリック) †c.461  
St. Colmcille (コルムキラ) c.521~597  
St. Columbanus (コロンバヌス) c.540~615  
St. Aidan (エイダン) †c.651

432. St. Patrickによる伝道開始

500. Latin文字からCelt文字を生む

St. Aengus (エンガス) †c.824  
Book of Kells ケルスの書 8~9世紀  
Book of Dun Cow ドウン・カウの書 中世に写本で遺す  
Book of Armagh アーマーの書  
Book of Leinster レインスターの書  
Book of Ballymote バリモートの書  
Book of Lecain レカンの書  
Book of Lismore リスモアの書

Mac Cuileannáin, Cormac (マク・クレノン) 836~908

Ó Broilchán, Mael Ísu (オー・ブロールホン) †1086

Malachy, Mael Maedoc (マラヒー) 1094~1148

O'Connor, Cathal (オ・コナー) †1274

O'Higgins, Teig Mór (オ・ヒギンス) †1315

O'Donnell, Manus (オ・ドネル) †1563

Céitinn, Seathrún (ケーチン) 1570~1650 (Oeffrey Keating)

O'Heffernan, Mahon (オ・ヘファナン) (†17世紀)  
Mac Daiahe, Anaus (マク・ダイア) (†17世紀)  
Ó Bruadair, Dáibhí (オー・ブルアダー) 1625~1698

1700

Raftery, Antoine (ラフトリー) 1784~1835

1800

Joyce, Patrick Weston (ジョイス) 1827~1914  
Ó Laoghaire, An tAthair Peadar (オー・リアラ) 1839~1920

1850

Ó Duinnín an tAthair Pádraig (オー・ディニン) 1860~1934  
Hyde, Douglas (ハイド) 1860~1949  
Bergin, Osborn Joseph (バーギン) 1873~1950  
Pearse, Patrick (ピアス) 1819~1916  
Ó Conaire, Pádraic (オー・コヌラ) 1883~1928  
Ó Buachalla, Liam (オー・ブアハラ) 1899~1970

1900

Ó Cadhain, Máirtín (オー・カイアン) 1906~1970

1916 (Easter Rising)

Ó Ríordáin, Seán (オー・リオードン) 1916~1977

Ó hÉigeartaigh, Seán Sáirséal (オー・ヘガルティアー) 1917~1969

1917

Máire Mhac an tSaoi (マック・アン・トイー)  
Seán Ó Matuna (オー・マトウナ)  
Aindreas Ó Muimhneachain (オー・ムイヴナハン)  
Cáit Dhomhnaill (ドウナル)  
Risteard Ó Glaisne (オー・グラシユナ)  
Seamus Ó Neill (オー・ネール)  
Liam Ó Flaithearta (オー・フラハルタ)

1985

英語による文学

1649. Cromwell 来征

Tate, Nahum (テイト) 英国桂冠詩人 1652~1715  
Swift, Jonathan (スウィフト) 1667~1745  
Berkeley, George (バークレー) 1685~1753

1700

Burke, Edmund (バーク) 1729~1797  
O'Connell, Daniel (オ・コーネル) 1775~1847  
Moore, Thomas (ムーア) 1779~1852

1800

Ferguson, Sir Samuel (ファークガソン) 1810~1886  
Allingham, William (アリンガム) 1824~1889  
Todhunter, John (トドハンター) 1839~1916

1850

Gregory, Isabella Augusta (グレゴリー) 1852~1932  
Wilde, Oscar (F. O'Flahertie Wills) (ワイルド) 1854~1900  
Shaw, George Bernard (ショー) 1856~1950

Yeats, William Butler (イエイツ) 1865~1939

Russell, George William AE (エーイー) 1867~1935  
Synge, John Millington (スィング) 1871~1909  
Joyce, James Augustine (ジョイス) 1882~1941  
Clarke, Austin (クラーク) 1896~1974

1900

O'Connor, Frank (オ・コーナー) 1903~1966

1916

(Easter Rising)

現代

John Jordan (ジョルダン)  
Terence Brown (ブラウン)  
Gregory O'Donoghue (オ・ドノー)  
Sean O'Faolain (オ・フェラン)  
Aidan Higgins (ヒギンス)  
Edna O'Brien (オ・ブライエン)  
Mary Lavin (ラヴィン)  
.....等

1985

古代ゲール語時代

中世ゲール語時代

近世前期ゲール語時代

近世後期ゲール語時代

## 4. アイルランド文化の背反性 –精神に於ける二極性–

### (1) アイルランド国民のアイデンティティー

長い年月を経て形成されるその国の国民性にはそれぞれ歴史的、民族的、地理的な要因がある。広く言われるアイルランド人の特徴は「素朴・お喋り・働き者・メランコリック・感情的・悲観的」である。変化の少ない最果ての豊かな緑と言語の島は、素朴でお喋り好きなアイリッシュを作った。酸性の強い決して豊かとは言えない土壌が働き者に、遠い昔に失った土地と文化の記憶がメランコリックに、度重なる支配が彼等を感情的にそして悲観的にした。今ここにイングランド人によるジョークがある。

「神は一週間つまり7日を創造した。月曜日から土曜日まで一生懸命働き、最後の7日目の日曜を休息の日とした。しかし、神はアイリッシュ達には8日目を創造した。8日目にはアイリッシュにウイスキーを作らせた。アイリッシュ達が世界を征服するのを防ぐ為にさ」

確かにアイルランドにはパブが多い。昼間には精霊や妖精達と暮らし、陽が落ちると酒精(スピリット/spirit)を愛する。だが、このジョークは実にシニカルでイングランド人の陰險なまでの優位感とアイリッシュに対する見下しの臭いがする。「お前らはやたらに働いて、イングランドより栄えたり目立ったりしたら承知しないぞ。俺達の言うことをよく聞いて陽当たりの悪い西側の裏庭でウイスキーでも食らってる」と聞こえるのだが。

アイルランド人、或いはアイルランド国民とは一体どんな人々のことを言うのだろうか。アイリッシュの特徴を述べるのはさほど難しくないが、アイリッシュネス (Irishness) を定義するのは難しい。色々な民族が流入し定住したこの国にあっては、最も国民の尊敬を集める聖パトリックですらローマ人の父とブリトン人の母を持っていたとの研究もある。現在のアイルランドは人種のるつぼだ。「アメリカ人」や「イギリス人」なる人種が存在しないように「アイルランド人」という人種もかなり不明確だ。ダブリンのトリニティーカレッジ (Trinity College) による研究によれば、現在に於けるアイルランド人を構成している要素として彼等の中でのケルトのDNAはわずか3%ほどだったという。

ケルトの遺伝子の数勢はケルトの文化の遺勢ほどにはなり得なかったのだろうか。

結局のところアイルランド人としてのアイデンティティーは人種ではなく文化的、社会的に培われるものなのである。アイルランド人に生まれるのではなく、アイルランド人になるのである。

## (2) アイルランドの風土のデュアリティー

アイルランドには二種類しか出せないジャンケンがある。一つが表を、もう一方が裏を表わす手の形のうち、思いつく方を同時に出す。二人が裏と表に別れたら改めてコインの表(head), 裏(tail)で勝ち負けを決めるのだ。日本のジャンケンと較べると何とじれったいことだろう。二つのうちどちらの立場に立つかを択一し、改めて運を天に託すのである。歴史的伝統的に見ると、アイルランドの風土には常にこのジャンケンの様に背反する二者を択一し、そして分極するという「心理」を生み出す土壌があった。

以下、それぞれのアスペクトに於ける二極化の実際の概察を試みる。

- ・ 民族的に見れば先住の民に対する新たに渡来して来る民族との軋轢関係が長く存在した。
- ・ 宗教的に見ればドゥルイド教に対するキリスト教・カソリックに対するプロテスタント。
- ・ 伝統的に見ればアングロ・サクソンの文化に対するケルトの文化という関係性があった。
- ・ 文学的にはケルト文学に対するアングロ・アイリッシュ文学の新旧関係が存在していた。
- ・ 歴史的に見れば征服者と被征服者・地主と小作人という主従関係・アイルランドを出る者と残される者という関係がその時代時代に存在していた。
- ・ 地理的に見ればヨーロッパ大陸（中心）に対するブリテン島（地方）という関係性が、そのままイングランドとアイルランドの関係に継起され、更にはアイルランド島内でも北と南、東と西とで分別、対立する関係性が徐々に生まれていった。

長い人類の歴史の中で、一国内で民族や宗教、文化などで対立関係を生み出すこと自体、さほど稀なことではない。しかしアイルランドほど諸々のファクターが複雑に絡み合って、多くにわたり見事なまでの二極化を生んだ例は他にまずない。

作家ルイ・マクニース (Louis MacNeice) はこう言った。「アイルランドはイングランドに比して人口も土地も小振りだが、頑固な地方主義を有しアイルランド内部に分裂をもたらしている。そしてこれらの地方的特色は相矛盾した性質をその本質に含んでいることから、アイルランド的なものを『一群の二律背反性』と言うのが相応しい」と。アイルランドの精神は誕生した時から、その内部に存在する二極性、背反性の中にあった。一つ屋根の下で背中合わせに暮らす者同士は、顔を見合わせず違った方向を見ているが互いの存在は認識し、時折言葉は交わす。イングランドに関わる同居人のその存在はアイリッシュの文化を顕在化させ、アイルランドのアイデンティティーの構築へと向かわせたのではないか。

### (3) アイルランド文化のケイパビリティ

ケルト人やケルト語、そしてケルト文化は独特な運命と生命力をそれぞれが持っている。古代ケルト人はヨーロッパ大陸で広範な地域で文化圏を形成したものの、やがて他民族の言語と混然と交ざり合い、中世になる頃までにその姿を次第に判別できなくなった。

だが、本流から別方向に流れ出した民族の小さな流れがブリテン島そしてアイルランド島に辿り着いた。勇猛なケルト人が大挙して侵入し、強引に先住民を征服した事を裏付ける考古学的資料は何一つない。ケルトのアイルランドへの上陸に関しては、現在次の二説が有力になっている。

- ① 少数のケルト人が断続的にアイルランド入りし、徐々に先住民より優勢になった。
- ② 暴力的に優位に立ったのではなく、ケルト人の文化が長期に渡って先住民の間に浸透していった。また、先住民の文化を一部移入した<sup>(10)</sup>。

アイルランドの大きな特質は、先に在ったり後から入って来る異民族や異文化を同化してしまうことである。この傾向は偶有的属性ではなく本質的属性とも言える。この同化の過程はいくつかの水の流れが数本にまとまり、やがて地中に浸透して別のところにその地の湧水としてひょこり湧き出すが如くに進行する。

北欧民族やゲルマン系民族の場合も移住者の中には非常にアイルランドに同化していった人々も多く、先祖達の文化を潔いほどに捨て去った痕跡がある。首都のダブリン (Dublin) は北欧民族が造った町だが、初めからその名称はゲール語で Dubh (黒い) Linn (プール) を合成したものだ。これはほんの一例に過ぎない。ゲール語は元々「勇気・哀しみ・美・醜・愛・心・森」などの名詞どれ一つ取ってみても、様々な程度やニュアンスを表わす為、語彙に於いて英語を圧倒する数と生命力を持つ。アイルランドの人々はかつて自分達が辿った経路を通して入って来る人や文化、宗教を賛意と反意を交えながらも、一旦は受入れながらやがてはアイルランド化してしまう。アイルランドは多くと混交し、同化してなおアイルランド的であり続ける生命力とケイパビリティ (capability, 潜在能力) を持つ。歴史の中で幾度となく侵略や支配を経験しながらも、アイルランド的 (ケルト的) であることを止めないのは、文化的、民族的に強い主体性を堅持し続けているということである。その底流にあるものは、かつて自分達を迫害したり、追いやったり、支配したヨーロッパ [イングランドも含めた] に対する抵抗精神と被害者意識であることは否めない。

アイルランドは文化に於いて相反する命題を熔融し同化し、互酬関係をも構築し、やがてアイルランド独自のアイデンティティーにまで昇華させ得たものは、まさにアイルランドのケイパビリティに他ならない。

## 5. アイルランドの現在と将来性 -現代に於ける二重性-

### (1) 英国との婚姻関係

20世紀に至るまで英国には伝統的に「アイルランド人用」と言われる職業が存在した。建設労働者・工場労働者・汚物処理業者・屠殺業者・墓掘り人など、英国人がやりたがらない仕事をさせ「第二の市民」という扱いをしてきた。

かつて英国とアイルランドは仲の良くない夫婦のようであり、その関係は破綻していた。家庭内暴力で支配し続け、嫌な仕事は任せきりで野心的で外面がすこぶる良い夫の英国。一方、妻アイルランドは陽当たりの悪い西側の裏部屋をあてがわれ外出もままならない。夫は「大英帝国」という肩書きを名乗る頃から、色々な所に「妾」を抱えていたりもした。そんな夫に妻が公衆の面前で初めて“No.” “Fuck off!” (くたばっちまえ!・うせろ!)と言ったのは第二次世界大戦中の事だった。アイルランドは英国の味方になって戦うより、「中立国」になることを宣言したのだ。これまで従順で言いなりだった妻アイルランドのこの断固とした態度に、英国はかなりのショックを受けたのは言うまでもない。

しばらくの別居生活を経た後1949年に離婚が成立し、彼女はアイルランド共和国という姓で生活し始める。アイルランドにとって英国は無視するにはあまりに近くに居たが、今や弟分の米国にこそ関心がある。英国との事や北アイルランド問題にはもうウンザリだった。現在も両者は愛憎関係にある。アイルランドは軍事的な保護や貿易、経済の安定を英国に依存し、英国はアイルランドに国際的な同盟国でいて欲しいという未練がある。しかし、国民のレベルでは少し違っている。英国ではアイルランド人を避けることはできず、色々な所でアイルランド英語を耳にする。だが、その割に英国人はアイルランドについて多くを知らない。学校ではアイルランドについてあまり教えず、大統領の名前すら知らない。英国人がダブリンに来て郵便ポストとバスが赤の代わりに緑色であることを除けば、英国とあまり変わらず、そこが英国の延長であり英国の一部だと感じるという。

逆にアイルランド人が英国に行って感じるのは「一見するとアイルランドと似ているが、でも全く違う」という感覚だそう。英国に住む平均的アイルランド人は年に3回里帰りをする。ロンドンーダブリン間はたった45分のフライトだ。こんなに近く隣り合った二つの島にはほぼ同じような歴史の風を大陸から受けて、似たような宿命も共有してきた過去がある。だから長い歲月連れ添った夫婦のように、お互いに気心が知れ合っているが故に愛憎が相半ばしているのかも知れない。

## (2) アイルランドの今日と明日

20世紀はアイルランドに自由と経済成長をもたらし、新生アイルランドの国造りが始まった世紀であった。だがかつてよりこの国の宿運ともいべき二重性、背反性を今だに払拭できている訳ではないのだ。北アイルランドは英連邦に留まり、カソリック系住民とプロテスタント系住民が対立し、アイルランドのIRAやユニオニスト（Unionist）の活動も続いている。しかしながら、アイルランド国内で露骨に英国を誇るのは時宜に適ってはいない。その理由は以下のようなものである。

第一に、そんなことをすればアイルランド人がほとんど支持していないIRAを喜ばすだけだからである。

第二に、アイルランドと英国は今「EU」のパートナーとして嫌でも共存していく必要があるからである。

第三に、アイルランドの人口の大部分は若者達であり、暗い過去の歴史の話などは算数かチャールズ皇太子のロマンスの話題くらい退屈だと感じているからである。

時代は確かに変っている。また、言語に於いては共和国の憲法でゲール語は第一公用語の地位を得ている。だが、実際には1996年の調査では10%程の人々が「ゲール語を運用する能力があると自負する」と答えるのにとどまっている。長かったイングランドの英語による支配がゲール語に貧困や後進性などのネガティブなイメージを植え付け、大飢饉と大量の移民が英語の必要性を増大させた。しかし、2002年の法整備ですべての公的機関でゲール語と英語での文書作成や学校でのゲール語の必修化が決められた。また、北アイルランドでも英政府による保護が得られ、公的地位を獲得した。経済面ではアイルランドは2004年のIMD（国際経営開発研究所）による世界競争力年鑑で総合10位にランクインしている。IT産業でも成長著しく「ケルティックタイガー」（Celtic Tiger）と呼ばれる経済成長は長年の財政再建の努力や企業誘致活動、教育制度改革、又何よりアイリッシュの勤勉さの賜物であろう。彼等は米国を始め英国、豪州、ニュージーランドにも移住した。

現在米国だけでも約4300万人、世界中には約7000万人の自称アイリッシュがいるという。毎年世界中で3月17日のセント パトリック デイが盛大に祝われている。かつて米国内でレストランやアパートに「犬・黒人・アイリッシュはお断り」と書かれた時代を経た後にケネディー（J. F. Kennedy）を始め4人のアイリッシュ系大統領も出すに至っている。将来に渡りアイリッシュネスがこの世界で果たす役割は益々大きくなるに違いない。なぜなら、アイリッシュネスは幾多の二律背反の中を生き抜いてきたからだ。そしてまた、この世界は今だ多くの二律背反に満ち満ちているからである。

## おわりに

「偉大なる国とは偉大なる人物を生み出す国である」という言葉がある。

多くの賢智を輩出してきたアイルランドはその意味においてまさに偉大なる国であった。また、「空きっ腹では誰も愛国者にはなれない」という言葉もある。重篤な飢餓の中で、多くのアイルランド人がその偉大な国を捨てた。そしてその蓋然性は極めて高いものだ。

「覇者の書く歴史書は敗者には悪夢であり、覇者の描く歴史画は敗者には地獄絵図である」という言葉どおり800年に及ぶ覇者イングランドによるアセンダンシーはアイルランドに悪夢と地獄を見せた。しかし、今ヨーロッパではようやく悪夢から目覚めたこの極西の地アイルランドとそのルーツに改めて目を向け始めている。

自然や異教徒を征服し続けてきたキリスト教型覇権主義社会や、物質への過ぎた信仰が行き詰まり閉塞感にあえぎ始めているのだ。そして、今更ながら森に妖精の住処をも与え、自然を尊び自然と折り合って生きてきたケルト的な「原ヨーロッパの精神文化」への回帰に関心を持ったり、志向する人々が増えているという。これは単なる懐古ではなく、過去の歴史への回顧であり、ヨーロッパの新しい価値観との邂逅を求める動向に他ならない。

本稿はアイルランドの民族や歴史、文化を瞥見した上で、文学史上の作品を例示しつつアイルランドの文化史上に見在した「二重性」・「二律背反性」について概察してきた。また、それが故にこの地や文学、或いは民族の精神に於いて帰結した「二元性」「二極性」についても、不十分ながら解き明かしたものと確信する。

そして更に、まるで磁引したり反発、背反する磁力がお互いに引き合い、或いは斥け合う時に生じるエネルギーのような「文化に於ける背反性、互酬性」の存在の解明をも試みた。

かつてケルト人達は西の果ての小さな島にたどり着いた。その地で多くの文化と交雑しアイリッシュネスを涵養した。そして再び太陽の如くに、西へ西へと移り広がっていった。今では世界に広がり再びヨーロッパに至る勢いだ。その昔、彼等は夜で時を計る太陰暦を用いたという。その後昼で時を計る太陽暦と出会い閏月を設け、太陽の運行を一致させる「太陰・太陽暦」を生み出した。彼等は常に背反するものとの出会いの度に、それらから反対に学び知恵を受け入れ、或いは与え合うという互酬関係をもって生き延びた。そして厳しい歴史の風の中文化の大輪の花を咲かせ、曠古な果実を地に落とした。アイルランドのみならず世界の何処にでも、そして何時の時代にも「矛盾」や「二律背反」は常在する。人類が東より昇る太陽の恵みを永劫に享受する為に、アイルランドから学ぶべきは多い。

## 注

- 1) 自称はゲール語でエール (Eire)。ケルト語の “re” (後ろ側・西側) が転訛し「西に住む人」という意味でエリン (Erin) と呼ばれた。その後12世紀からイングランドの支配を受け、英語の発音のアイル (Ire) にゲルマン語の「土地」を意味するランド (land) が付けられた。独立戦争の後1949年に独立し現在のアイルランド共和国となる。
  - 2) [哲・独] “Antinomie”・相互に対立し矛盾する二つの命題が同じ権利をもって主張されること。カントは理性だけで世界全体の根本的問題を解決すると二律背反に陥ると指摘。
  - 3) 個人或いは集団間で、贈与を受けた側が与えた側に何らかの返礼をすることによって、二者、または集団の間で相互関係が更新されたり維持されたりする性質・傾向性。
  - 4) ハルシュタット——1000~500 B.C. にオーストリア南西に起こった欧州の初期鉄器文明。  
ラ・テーヌ———550~120 B.C. にスイスの東部に起こった第二の欧州初期鉄器文明。
  - 5) [統] 反事実仮定法モデル・歴史上に起こったある事実が、起こらなかったと仮定した時に導き出される影響やその結論、数的結果を統計学的に推測・試算してみる方法。
  - 6) 1916年復活祭明けの4月24日の月曜日にダブリンで起きた反英蜂起。中央郵便局を占拠し共和国の成立を宣言したが、6万人の英国軍を前に一週間で数千人の死傷者と16人の処刑をもって蜂起は失敗に終わった。その後民意を掴み1949年の独立に繋がる。
  - 7) アイルランド共和国軍 “Irish Republic Army”・北アイルランドの英国からの独立、また更には南北アイルランドの統一を目指し活動するナショナリストの武装過激組織。
  - 8) アイルランドの守護神・5世紀の初頭にアイルランドのキリスト教化に功績のあった伝説的伝道者。ブリタニアのカソリック助祭を父にもち、16歳で侵冠者に奴隷としてアイルランドに連れて来られたが、6年後に脱走し15年の修行の後再び入島した。
  - 9) 1865~1939/ダブリンに生まれ・アングロアイリッシュ文学の巨星として詩や演劇の分野でアイルランド文芸復興運動の中心人物として活躍し、1923年にノーベル文学賞を受ける。作風はケルト的資質に負う孤高で幽玄な神秘的理想主義を特徴としていた。
  - 10) これを裏付ける事実の一つとして、アイルランド語群 (ゲール語群) の中にはケルト語をその起源としない多くの非ゲルマン語系の言葉が存在することが挙げられる。
- \* 論述中「英国」(The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland) の表記は20世紀以降の史実及び内容について述べる際に用いて、19世紀以前の史実および内容について述べる際は「イングランド」(England) を用いることを原則とした。また、彼等 (英国人及びイングランド人) の主な国土を意図する場合は「ブリテン」(Britain) と表記した。
- \* Introduction部の下作 “A MISTLETOE” (宿り木) の英文と和文は筆者自身の戯作である。

## 参考文献

- Yeats, William Butler. W. B. Yeats and T. Sturge Moore: Their Correspondence, 1901-1937. ed. Ursula Bridge. London: Routledge & Kegan Paul, 1953.
- Yeats. W. B. Uncollected Prose by W. B. Yeats Vol.1: 1897-1939. ed. J. P. Frayne. New York: Columbia University Press, 1970.
- Yeats. W. B. The collected Poems of W. B. Yeats, London: Macmillan, 1950.
- Yeats. W. B. The Poems: A New Edition, ed. Richard J. Finneran, London: Macmillan, 1983.
- Clark, D. R. W. B. Yeats and the theatre of Desolate Reality. Dublin: Dolmen, 1965
- Dorn, Karen, Players and Painted Stage: the Theatre of W. B. Yeats. Sussex: The Harvester Press, 1984.
- Flower, Robin, The Irish Tradition, Oxford: Clarendon Press, 1973.
- Engelberg, Edward, The Vast Design: Patterns in W. B. Yeats's Aesthetic, Toronto: University of Toronto Press, 1964.
- Eagleton, Terry. The Truth about the Irish. London: New Island Books. 1999.
- 小林章夫訳「とびきり可笑しなアイルランド百科」・(株)筑摩書房、2002.
- 櫻庭信之. “Irish History and Literature” —アイルランドの歴史と文学—大修館書店、1986.
- 三橋敦子. 「アイルランド文学はどこからきたか」—英雄・聖者・学僧の時代—誠文堂新光社、1985.
- 藤本黎時「イエイツ」—アングロ アイリッシュのディレンマー (株)溪水社、1997.
- 河野賢司「現代アイルランド文学論叢」・(株)大学教育出版、1997.
- 松村賢一編「アイルランド文学小事典」・研究社出版(株)、1999.
- 宗形美樹「アイルランドがわかる本」・鳥影社、2005.
- 森ありさ「アイルランド独立運動史」・(有)論創社、2001.
- 海老島均「アイルランドを知るための60章」・(株)明石書店、2004.
- 波多野裕造「物語アイルランドの歴史」—欧州連合に賭ける“妖精の国”—中央公論新社、1994.
- 風呂本武敏「アングロ アイリッシュの文学」—ケルトの末裔— (株)山口書店、1992.
- 武部好伸「イングランド ケルト紀行」—アルビオンを歩く— 彩流社、2006.
- 田文揚「ザ マジカル リリカル リリックス」—泡沫の一雫— 星雲社、1998.